

## 〔研究ノート〕

## 流れとしての組織

稲垣保弘

## &lt;目次&gt;

- I 静止画
- II 構造
- III 構造化
- IV 動画

## I 静止画

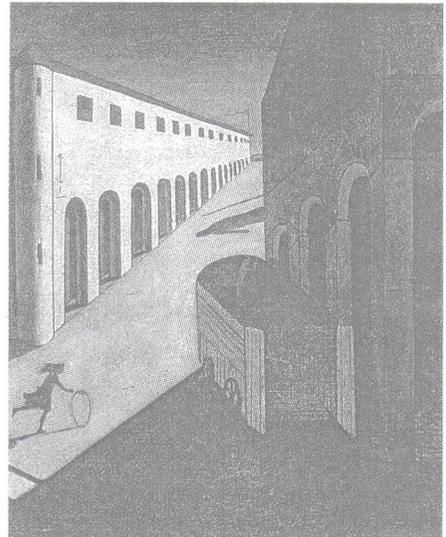
「流れとか変化こそ管理者が管理するものの本質である」<sup>1)</sup>、これは、Weickによる指摘である。管理の対象、あるいはその場となる流れとしての組織。イメージとしては魅力的だが、このテーマについてどのように理解を深めていけばよいのだろうか。

ここでは、組織の流動性についての考察を、嶋長明『方丈記』の有名な冒頭部分とキリコ(Chirico)の絵画『通りの神秘と憂愁』(図 I-1)を検討することによって、その手がかりを探ることから始めよう。この二つには、静止と動きとの奇妙な関係性が潜在している。

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある人と、栖とまたかくのごとし<sup>2)</sup>。

河はいつも変わらずに流れているように見えるが、同じ岸边に佇んでいても、その目の前を流れている水は、以前に見たもの水ではない。淀みに浮かぶ泡も、消えたかと思うと、浮かび出て、そのままの形でいたためしはない。世の中に存在する人とその住むところの関係も、この河の流れのようなものだといっているのだ。

図 I-1



(出所) 日本経済新聞(朝刊), 2010年, 2月12日

このように、この世の無常を、人と住むところ、すなわち場所とそこを占める人、それらの関係と移り変わりから見つめて、河の流れと淀みに浮かぶ泡の比喻で説いている。

ここでは、この世、すなわち社会ではなく、組織を流れとして検討してみよう。二つのポイントが問題となる。

一つは、変わらずに流れているように見えるものが、じつは変容を孕んでいること。すなわち、別の水が、つぎつぎと同じ場所=位置を通過し、しかもその場所と他の場所との関係は、刻々と変容しているかもしれない。これが流れという現象だとすれば、組織の流れの中に顕在化する組織形態ないし組織構造といったものは、流れの一場面、あるいは一断面を映し出すスナ

ップ写真や断面図のようなものだろう。

だが、一場面、あるいは一断面という流れの中に顕在化する一瞬を映し出したものだとすれば、そこには流動性の徴候が示されている、少なくとも潜在化しているはずである。

夢幻的で形而上学的な風景画を大成した、イタリアのシュールレアリズムの画家キリコの代表作『通りの神秘と憂愁』<sup>3)</sup>は、その徴候を鮮かに映し出して、一場面からの流動性を考察する明確な手がかりを与えてくれる。田名網敬一の臨場感あふれる批評によれば、この名画は、連結する動きの、ある一瞬を停止したような絵だという<sup>4)</sup>。

神秘的な陽光に照らされたイタリアの街並み。画面の左下から右上に向かう、極端な遠近法によって描かれた通り。その通りの左手前の方で、輪回しをしているシルエットの少女。通りの先で、少女を待ちうけるかのように通りに落ちた細長い人影。その影の長さは夕暮れの訪れをも予感させる。誰なのか、その姿は建物の陰になって見えない。影の主は少女を見守る父親か、何らかの意図を秘めた他人か、単なる傍観者か。肉眼でとらえられる世界の光景によって、潜在する隠れた神秘性を呼び起こし、画面は緊張感にあふれる。そこには、予感や気配として、つぎに起こりうる動きが潜在している。

ここには、人がいる、事象がある。それらに意味をもたせる配置、関係性がある。そこから生成されるイメージがある。しかし、その関係性は潜在的なところで場面の展開を変容させる徴候を生成し、イメージは確定せずに揺れている。流れの一場面は、多様な意味形成の可能性を孕んでいる。

もう一つのポイントは、流れの推進力である。ゆく河の流れは絶えずして——何がこの流れを生み出しているのか。

Weick は、組織の変化について、つぎのように述べている<sup>5)</sup>。

われわれにあっては、混沌から秩序への不可避で不可逆な足取りは、組織の成長の不可欠な特徴とは考えていない。代わりに、システムの現在の状態は初期の状態からの

不断の変化の結果であって、その変化が秩序を増大させる方向である必要はないと考えている。

われわれは、変化が組織の特徴と考えるが、不断の変化を生む力それ自身は比較的不变の法則とも考える。

Weick は、秩序への変化としての進化ではなく、変化としての進化という発想にもとづいて、効率性、計画性、予測性、存続性といった秩序についての先入観を進化の基準とすることに疑問を呈している<sup>6)</sup>。組織は流れているが、それは秩序形成の方向に向かうとは限らず、ただ変化を生成すること、それが組織の特徴だといっているのである。

そして、組織現象を組織化という過程で捉えて、組織化の進化論的モデルを提起している。この進化論的モデルは、生態学的変化 (ecological change)——イナクトメント (enactment)——淘汰 (selection)——保持 (retention) という各過程を構成要素とするのだが、その契機は、生態学的変化、すなわち、人や組織がかかわる経験の流れの中の不連続、差異、変化である<sup>7)</sup>。

また環境ないし状況への適応を重視するコンティンジェンシー理論では、環境ないし状況の変化への適応が、組織活動に変化を生み出すことになる。それは、川の中に投げ込まれた大きな岩石 (環境の変化) が、流れを変えるようなものであるが、その流れの変化の推進力は、岩石によって生み出された差異である。

『方丈記』では、川の流れの推進力は、地面の高度差——水は高きより低きに流れる——しかないだろう。高度差、それは一般化すれば、差異である。

環境の変化も、生態学的変化も、状況の変化も、それ以前の状態との差異として生起する。差異を埋めて変化に適応するために、流れに変化が生まれるのだとすれば、それは以前の状態を復元するためではなく、この差異は、何か基準となるものがあって、そこから離れている、違っているということよりも、差異の存在、それ自体が問題となるだろう。

差異が失なわれたとき、流れは止まって淀む。

流れていくためには、差異が必ず必要になる。流れの推進力としての差異、これは組織現象の流れではどのように捉えられるのだろうか。

## II 構造

Whitehead によれば、「すべての事物は流れる」という仮説は、人間の直観が生み出した最初の普遍化であり、哲学体系を構築するための基礎となりうるものだという。

もし技巧を凝らした理論の進め方によって歪められていない究極的で統合的な経験、すなわちその説明 elucidation こそが哲学の最終目的であるところの経験に立ち戻るならば、事物の流動 flux of things は、われわれがそのまわりにわれわれの哲学体系を織りあげなければならぬところの、一つの究極的な普遍化である、ということに疑問の余地はない<sup>8)</sup>。

Whitehead は、この普遍的仮説にもとづいて、「事物の流動」を把握するために、「過程」という概念を提起している<sup>9)</sup>。「事物の流動」を捉えるための概念が「過程」なのである。

この過程と経営管理についての考察は、すでに別の機会に行なっている<sup>10)</sup>。また、組織形態が組織現象の流れの中で過渡的に顕在化するものであることも、別の機会に論じている<sup>11)</sup>。ここでは、それらの考察を補足する意味でも、組織現象の流れ、あるいはその流動性の一断面としての構造について検討しておこう。キリコの『通りの神秘と憂愁』の示すような流動性を潜在化させた構造についてである。いや、構造とは本来、そうしたものであるはずなのだ。

組織理論の分野では一般に、組織構造は、組織における仕事の分担や権限配分のパターンとして理解されて、組織内の仕事の分担関係や階層的権限関係によって、組織メンバーの行動をコントロールし、組織内の権限行使、意思決定、組織活動の実行の枠組みを作り出す機能を果たすと考えられている<sup>12)</sup>。

特に組織のコンティンジェンシー理論では、

このような組織構造の概念は、「集権化」、「公式化」、「複雑性」などの次元に操作化されて、実証的研究がなされ、組織の特徴の明確化や、環境への適応性についての研究成果が蓄積されている<sup>13)</sup>。

ここでは、別の観点から、構造そのものについて検討してみたい。フランスの思想家の Deleuze は、構造主義という思想に示される構造について考察している。

Deleuze によれば、まず構造とは、現実的でもなく想像的でもなく、記号的なものである。したがって、構造について理解するためには、「現実界の秩序にも想像界の秩序にも還元できないし、両者よりも深くにある、記号界の秩序を指定する」ことになる<sup>14)</sup>。構造そのものは、現実の形態でもないし、イメージでもない。

構造は、受肉しながら、現実性とイメージを構成する。しかし、構造は、現実性とイメージから派生するのではない。構造は、現実性とイメージより深いからだ。構造は現実界のすべての地層に対して、また、想像のすべての天界に対して、下にある地層である<sup>15)</sup>。

構造は、現実性とイメージから派生するのではなく、現実性とイメージを形成する。現実化していない、しかし、単なるイメージでもない記号的秩序が構造を形成している。では、構造を構成している記号的な要素とは何か。

記号要素は現実的なものとも想像的なものとも区別されるから、構造の要素を確定するものは、構造要素が関与したり指示したりするような先行する現実性でも、構造要素が合意したり意義を与えられたりするような想像のないし概念的な内容でもありえない。構造要素には、外的な指示性も内的な意義もない<sup>16)</sup>。

構造の要素には、他の何らかの現実的なものを示す外的な指示性も、それ自体に内在する意味内容、すなわち内的な意義もなく、したがっ

て、残るものは、記号的な秩序の中での「位置」に関わる方向性だけであり、それが、構造の要素自体の意味であるという。

構造の要素には、方向＝意味以外のものはない。この方向＝意味は、必ず「位置」だけに関わる。問題になるのは、現実的な延長物における場所でも、想像的な延長における場でもなく、まさしく構造的な空間、言い換えるなら、トポロジカルな空間における場所と場である。構造的なものとは、空間のことである。ただし、非延長的な空間、前一延長的な空間、近傍の秩序として次々と構成される純粋空間 (spatium) である<sup>17)</sup>。

構造の要素は、記号的秩序の要素であるから意味をもつ。しかし、それは、内的意義でも、外的指示性でもない。構造は意味連関として捉えられているが、構造の要素には、「位置」だけに関わる方向性＝意味しかない。すなわち、それ自体ではシニフィアン（意味表現、意味するもの）ではない複数の要素の結合から、常に意味は由来することになり、構造の要素のもつ意味は、「常に帰結、結果」である<sup>18)</sup>。

構造の要素の意味形成については、場所＝位置が問題なのである。構造の要素は、それ自体では、意味を内在させず外的指示性をもたずに、複数の要素間の関係の中で、各々が相互に確定される<sup>19)</sup>。「関係の只中で相互に確定されるこの過程においてこそ、記号の本性が定められる」のである<sup>20)</sup>。したがって、構造は要素が相互に確定されて、近傍の秩序として構成されている空間なのである。意味は構造内部の場所＝位置の結合によって形成されている。

このような記号界の空間的秩序としての構造が、受肉、すなわち形をとって、現実化し、イメージが形成される。

要するに、初めに純粋に構造的な空間における場所があり、その後に現実的な事物と存在者が場所を占めにやって来るし、またその後に、場所が現実的な事物と存在

者で占められるときには、常にいくらか想像的な役割と出来事が必ず現われ出る<sup>21)</sup>。

記号秩序のなかで要素が相互に確定される関係によって、要素の位置の役割が規定され、場所＝位置がそれを占めるものに先行する。位置が、その場所に入るものの意味と機能を規定する。このような構造それ自体は、理念的で潜在的なものである。位置としての構造要素は、潜在的に方向＝意味を示すのである。ただし、Deleuze は、この構造に、その潜在性にリアリティを求める。それは、現実中存在するという事ではない。そうではなく、受肉する、すなわち形をとることで現実化するというのである。

現実的なものとは、その中で構造が受肉するもの、あるいはむしろ構造が受肉しながら構成するものである<sup>22)</sup>。

潜在的なものとしての構造は、現実的なものを形成するのである。現実化してはいないが、イメージや抽象的観念とも違う。

構造についてはこう語られるべきである。現実的ではないがリアルであり、抽象的ではないが理念的であると<sup>23)</sup>。

そして、構造の要素を相互に確定する要素間の関係が、特異点を分布させて、特異性を生成する<sup>24)</sup>。すなわち、構造の要素が関係のなかで確定され、三角形の三つの頂点のように、特異点はその構造に特徴的な空間を描き出す<sup>25)</sup>。特異点はその構造から派生するイメージ形成の起点ともなる。

たとえば、かつての日本的経営において、昇進と賃金に同期ではあまり差のつかない年功序列が、入社後約15年間機能し、その後に差異が生まれるという指摘がある<sup>26)</sup>。この約15年間、差がつかないことで、マラソンのトップ集団のような諦めの入り込みにくい競争状態が維持されて、社員の活力が引き出され、業績に結びつけられる。ぬるま湯の代名詞とされやすい年功

序列制の下での、この激しい長期的競争という特性は、この入社後約15年目という特異点の存在が生み出している。特異点の存在によって、構造はその特異性を確保する。

Deleuze は、ある領域に構造の存在する条件について、以下のように明らかにしている<sup>27)</sup>。

どんな領域にも構造はあるのかという問いは、精確にはこう問われるべきである。ある領域において、それに固有の、記号的要素、微分的関係、特異点を取り出すことができるのかと。記号要素は、当の領域のリアルな存在者と対象に受肉する。微分的関係は、存在者のリアルな関係に現実化する。特異性は、構造内の位置と同じ数だけあって、位置を占めにやってくる存在者や対象に対して、想像的な役割を配分する。

ここで、微分的な関係とは、既述のような、その関係によって複数の要素が相互に確定され、方向＝意味が示されるような関係である<sup>28)</sup>。また特異点を起点に形成される特異性が構造を覆うのである。

さて、このような構造が、一瞬のスナップショット、あるいは断面図を超えて、組織の流れの徴候を示すためには、その中に時間性をもたなくてはならない。

時間は潜在的なものから現実的なものへと進行する。言い換えるなら構造から構造の現実化へと進行する。時間は、現実的な形態から別の現実的な形態へと進行するのではない<sup>29)</sup>。

構造に関わる時間とは、潜在的なものとしての構造が受肉して、すなわち形をとって現実化していく時間である。ある現実の形態が、直接的に別の現実の形態に変容するのではなく、潜在的な構造がある形態に現実化し、また変容した潜在的な構造は、別の形態に現実化する。連続する時間は、潜在性としての構造が現実化する方向へと流れる。構造は記号的な秩序の空間として、潜在的、理念的でありながら、現実化

するダイナミズムを秘めたものである。

この潜在性から現実化へという流れは、Whitehead の提起する二つの過程のうちの一つとその方向性において重なり合う。Whitehead は、「過程」について以下のように述べている<sup>30)</sup>。

巨視的な過程と微視的な過程という二種の過程が存在する。巨視的な過程は、達成された現実から達成しつつある現実への移行である。一方、微視的な過程は、単にリアルに過ぎないところの諸条件を確定的な現実へと転換すること conversion である。前の過程は、「現実的」actual なものから「単にリアルに過ぎない」merely real ものへの移行を生み出し、後の過程は、リアルなものから現実的なものへの成長 growth を生み出す。前の過程は作用因的であり、後の過程は目的論的である。未来は、現実的であることなしに単にリアルに過ぎないのだが、過去は、諸現実の一つの結合体 a nexus of actualities である。諸現実は、それらのリアルな発生の諸相 real genetic phase によって構成されている。現在というものは、リアルであること reality が現実的になる目的論的過程の直接性なのである。巨視的な過程は、リアルな達成を統轄している諸条件を提供し、微視的な過程は、現実的に達成される目標を提供する。

Deleuze のいう潜在性から現実化へという流れは、Whitehead の微視的な過程と重なり合う。また、Deleuze が潜在的、理念的なものである構造に求めたリアリティとは、Whitehead のいうリアルなものと同じ意味で使われているのだろう。

### Ⅲ 構造化

ここではさらに、構造の孕むダイナミズムについて、潜在性から現実化へという方向の他に、構造の再生産 (reproduction) という観点からも検討しておこう。社会学者の Giddens は、構造について以下のように述べている<sup>31)</sup>。

構造は、「集団」とか「集合体」、「組織」ではない。そうした「集団」や「集合体」、「組織」が構造を《持つ》のである。

構造は、組織や集団の現実の形態ではなく、それらの属性だというのである。さらに、Giddens は次のようにも述べている<sup>32)</sup>。

システムには構造、より正確には構造特性があり、システムは構造そのものではない。したがって、構造は（論理的に）システムや集合体の特性であり、「主体の欠如」を特徴とする。

組織は構造特性をもつ。この特性は、形をとって現実化することで、組織形態や組織活動を形成する。Giddens は、構造の二重性に注目して、構造化（structuration）という概念を提起している。

構造は「主体不在」であることを私はすでに指摘しておいた。相互行為は、主体の行動によって、また主体の行動において、構成される。《構造化》とは、実践の再生産として、構造がそれによって存在するようになる動的過程のことを、抽象的にはいうのである。《構造の二重性》ということで、社会構造は人間の行為作用によって構成されるだけでなく、同時にそうした構成をまさに《媒介するもの》であることを、私は意味する<sup>33)</sup>。

ここで示されているのは、構造を行為への拘束として捉えて、構造を行為に対立させる視点ではない。相互行為という主体的な行為と主体不在の構造とを結びつけて、構造の再生産、すなわち新たな構造の創出、あるいは構造の変容のダイナミズムを明らかにしようというのである。もちろん、構造から別の構造への直接の変化ではなく、構造の現実化としての相互行為を媒介にしての変化である。すなわち、相互行為は構造が形をとる現実化として形成されるが、その相互行為が構造に変容を迫ることもある。

構造化の概念が意味するのは構造の二重性である。構造の二重性は社会生活に基本的な再帰的性格に関係しており、構造と主体的行為（agency）との相互依存を示している。構造の二重性によって私が示したのは、社会システムの構造特性は社会システムを構成する実践の媒体であるとともに帰結である、ということだ。したがって、構造化の理論が定式化されれば、共時態と通時態、静学と動学の区別は廃棄される。つまり、構造は、可能にするとともに拘束するものである<sup>34)</sup>。

構造特性は、組織やシステムにおける行為を形成し、またその行為の帰結としてある。これが構造の二重性である。構造化は「構造の継続性や変換、すなわちシステムの再生産を支配する条件」として定義され<sup>35)</sup>、構造化の理論は、時間軸の横断面に見出される共時態としての空間のアレンジメントと時間軸に沿って動く変動としての通時態、すなわち、キリコの『通りの神秘と憂愁』に示されたアレンジメントと徴候＝予感、これらを区別なく統一的な枠組みで捉える可能性を提示している。

構造と行為の相互依存を考察するにあたって、行為も二面的に捉えられている。

行為のあらゆる過程で何か新しいものが作り出されるという意味で、行為は新鮮である。しかし同時に、すべての行為は過去との連続性を保っており、過去によって行為の創始の手段を与えられる。したがって構造は、行為を阻害するものとしてではなくて、行為の産出に本来的に関係するものとして概念化されなければならない<sup>36)</sup>。

相互行為と構造の相互依存的な循環活動といった反復的過程の中で、相互行為は既存の構造特性に依存して形成され、また新鮮な行為として、構造を創出ないし変容させていく。

Giddens によれば、特性としての構造を形成しているのは、組織化された規則と資源だという<sup>37)</sup>。すなわち、場所＝位置、方向性＝意味の

アレンジメントに、そして潜在性の現実化に、規則と資源が関わってくる。規則は拘束的であるとともに、規則によってどうすべきかが規定され、行為が可能になる。「規則を適用することは、(有意味な)活動の形態をうみだすこと」<sup>38)</sup>なのである。さらに、「行為者が相互作用の過程の性格あるいは結果に影響を与えようとして引き出すあらゆる種類の優位性ないしは能力」<sup>39)</sup>としての広い意味での「資源」が、相互作用に参加した人々の相対的影響力を構成するといふのである。しかも、規則と資源は、「社会的相互作用の遂行の媒体であり、それ自身つねに社会生活の変化に巻き込まれている」<sup>40)</sup>のであるから、構造は静態的なものであることを意味しない。

そして、Giddens は構造と行為の循環的な相互依存という構造化の様相に、全体性と契機という概念を導入して、つぎのように述べている<sup>41)</sup>。

構造の二重性の概念によれば、規則と資源は相互行為の産出において行為者のよりどころとなるものであるが、相互行為をとおして再構成されるものである。したがって構造とは、契機と全体性との関係が社会的再生産において明らかになる様相(mode)なのだ。この契機と全体性との関係は、機能主義者の理論が仮定する社会システムへの行為者および集団の調整という意味での「部分」と「全体」の関係とは異なる。

機能とは、部分の全体に貢献するはたらきであるから、機能主義的発想では、全体のためにそこに包括される諸要素を部分として位置づけ、調整するということになる。しかし、構造の二重性とは、構造によって相互行為が規定されるが、また相互行為によって構造が変容する、すなわち再生産されるという二重性である。ここでは、「契機(moment)」という用語が使われている。相互行為は、構造という全体性に規定されるという局面をもちながらも、一方で新たな構造の創出ないし変容の契機としても捉えられている。

構造化の理論によって示されるのは、潜在性から現実化へという流れの他に、相互行為を契機とする構造の再生産、すなわち現実から潜在性への流れである。ここで、構造は、組織現象の流れの一瞬のスナップショット、あるいは断面図であっても、過去からの痕跡としての場所＝位置のアレンジメントと変容への徴候を映し出していることになる。構造は、潜在的で理念的な記号界の秩序であるとともに、過去からの慣性の様相としてのアレンジメントと将来の変容の徴候を併せ示す境界としても理解できることになる。

#### IV 動画

Deleuze の指摘するように、構造の要素が内在的意味も外的指示性ももたず、他の要素との相互関係によって、その意味＝方向性が確定されるのだとすれば、構造は記号界の秩序であっても、あるコードで要素の意味を一義的に確定できるような記号体系ではない。したがって、構造についてある特定のコードによって、ひとつの意味を確定すべく解読することはできない。その理解のためには、解釈が必要となる。解釈については、すでに別の機会に論じているが、ここで簡単に触れておこう<sup>42)</sup>。

あるテキストを解釈する場合、少し読み進むうちに、すなわちテキストのある部分に触れることにより、それを包括する全体——それはテキスト全体かもしれないし、「近傍の秩序」に当たる部分かもしれない——の先取りがなされる。その全体像にもとづいてさらに読み進むと、テキストの別の部分が、先取りされた全体像への異例として現われてくる場合もある。このとき、全体像が変容し、この新たな全体像が引き続くテキストの読みを導いていく。このように、読み進むうちに会おうテキストの各部分は、先取りされた包括的全体の中に位置づけられていくが、ある部分との出会いが異例の経験として、全体に変容を迫ることもある。

解釈とは、部分を手がかりに全体像を先取りし、それにもとづいて部分の意味を明らかにするだけでなく、異例としての部分との出会いに

より全体像を変容させる行為でもある。これを、Diltheyは「個々のものから全体を、しかし再び、全体から個々のものを、という循環」、すなわち解釈学的循環として、解釈学上の中心的難問に位置づけている<sup>43)</sup>。部分は全体から理解されなければならない、全体は部分から理解されなければならないという堂々巡りになるからである。

ただし、解釈学的循環とは、全体と部分の間を循環しながら展開していく過程であるが、全体の理解も部分の意味も、その展開につれて変容していくかもしれない。変容、差異を孕んだ反復なのである。包括的全体、あるいは近傍の秩序であっても、不変ではない。このように解釈学的に構造化の様相を考察するとき、そこに現出する全体性はイメージではなく、イメージを派生させる近傍の秩序、すなわち潜在的リアリティとしての構造なのである。

組織の流れの中の変化とは、それまでの慣性からは隔たり、すなわち差異のある異例としての行為ないし事象に遭遇したときに、それを契機として新たな包括的全体——近傍の秩序である潜在的リアリティとしての構造——を創発して、その契機にそれまでとは違った意味を付与することで生起する。ここで過去からの慣性とは、それまでの包括的全体、すなわち構造によって付与された意味に導かれた流れである。行為あるいは事象と包括的全体との関係は、機能主義的な全体優位の発想にもとづくものではなく、契機の識別と創発された包括的全体との間を揺れ動く相互規定の循環的ダイナミズムが、全体性の規定による硬直化と部分の放埒による秩序消失の流れの中で回避する。

すでに別の機会に、暗黙知の構図との関連で重層的な意味の世界について考察した中で、意味階層の一つ上位のレベルから対象に注目すれば、対象は「実体」として顕在化し、一つ下位のレベルから注目すれば、対象は「虚構的」に現出することが指摘されている<sup>44)</sup>。

ここでの考察は、この上位レベルと下位レベルの相互規定の循環が、組織現象の流れの中で生起することも示している。「歴史的事実」という言葉があるように、過去は「実体」として

顕在化する。それは、創発された包括的全体から、行為や事象を部分として回顧的に見るときである。実体的な顕在化と虚構的な現出は、階層的意味空間の中だけでなく、時間の流れの中でも生起する。したがって、新たな包括的全体が創発される時、「実体」としてその意味を定着させていた過去の行為や事象がその様相を変えるかもしれない。組織の流れの慣性が、途切れるときである。官僚主義的組織というのは、組織現象の流れの中で遭遇する異例を逸脱として排除することで、過去からの慣性に流され、それに浮遊している組織だともいえるだろう。

また、ここまでの考察を踏まえると、行為や経験についての合理性は、回顧的にふり返った過去の行為や経験について成立する回顧的な合理性にすぎないのかもしれない。ある行為について、その後に創発された包括的全体の中に位置づけてみれば、合理的説明が成立する。組織活動を理解しようとするときに、過ぎ去った行為や経験をある時点でふり返るならば、そのときの活動を導いている包括的全体にもとづいて、そこに至るまでの活動の流れについて、論理必然的な道筋を見出して合理的な説明が形成されるだろう。

しかし、将来、別の包括的全体が創発されれば、異なった「合理的」な説明が可能になるかもしれない。行為や経験についての合理的説明、あるいはそこに成立する合理性とは、特定の時点で過去をふり返って、一時的に確定されたものにすぎないという意味で、暫定的な回顧的合理性の性格を色濃くもつ。

組織の流れの推進力となる差異は、慣性からの隔たりの経験、すなわち異例として現れる。この差異は、それまでの慣性的活動を理解していなければ、識別できないが、新たな包括的全体の創発に結びつかなければ、推進力とはなり得ない。したがって、何か基準となるものがあるところから離れている、違っているということではなく、差異そのものが問題となる。

キリコの『通りの神秘と憂愁』では、過去の痕跡としての潜在的アレンジメントが現実化した風景に、変化の徴候と気配が不安定さと緊張感を漂わせている。構造という組織の流れの一

瞬、一断面をとらえた構図に示される痕跡と徴候は、全体性の変容とその契機の相互循環を潜在的に映し出す。

このような解釈学的循環について、Heideggerは、「この循環の内には、最も根源的な認識の、或る積極的な可能性が隠し蔵されている」のであるから、「決定的に大切なことは、循環から抜け出すことではなくて、正しい仕方に従ってその内へ入って行くことである」と述べている<sup>45)</sup>。

<注>

- 1) Weick, K.E., *The Social Psychology of Organizing*, 2nd ed., Rondon House, 1979, p.42 (遠田雄志訳『組織化の社会心理学 第2版』文眞堂, 1997, p.123).
- 2) 水原一監修・籠谷典子著『枕草子・方丈記』中道館, 1982, p.28.
- 3) 日本経済新聞(朝刊), 2010年2月12日, 32面.
- 4) 田名網敬一「影のポエジー」, 日本経済新聞(朝刊), 2010年2月12日, 32面.
- 5) Weick, K.E., *op. cit.*, 1979, p.120 (邦訳, p.155).
- 6) *Ibid.*, pp.120-123 (邦訳, pp.156-158).
- 7) *Ibid.*, pp.130-132 (邦訳, pp.168-172).
- 8) Whitehead, A.N., *Process and Reality: An Essay in Cosmology*, corrected ed. (Griffin, D.R. and Sherburne, D.W. eds.), The Free Press, 1978, p.208 (平林康之訳『過程と実在: コスモロジーへの試論』みすず書房, 1981, p.307).
- 9) *Ibid.*, pp.208-215 (邦訳, pp.308-318).
- 10) 稲垣保弘『組織の解釈学』白桃書房, 2002, 第2章.
- 11) 稲垣保弘「組織編成の次元と形態」法政大学経営学会『経営志林』第42巻第4号, 2006年1月, pp.77-85.
- 12) Hall, R.H., *Organizations: Structure and Process*, 2nd ed., Prentice-Hall, 1977, pp.97-128.
- 13) *Ibid.*, pp.130-193.
- 14) Deleuze, G., "A quoi reconnaît-on le structuralisme?" in Châtelet, F., ed., *Histoire de la philosophie*, t. VIII, Paris, Hachette, 1972 (小泉義之訳「何を構造として認めるか」小泉義之他訳『無人島 1969-1974』河出書房新社, 2003, p.64).
- 15) *Ibid.*, (邦訳, pp.62-63).
- 16) *Ibid.*, (邦訳, p.65).
- 17) *Ibid.*, (邦訳, pp.65-66).
- 18) *Ibid.*, (邦訳, p.67).
- 19) *Ibid.*, (邦訳, p.70).
- 20) *Ibid.*, (邦訳, p.70).

- 21) *Ibid.*, (邦訳, p.66).
- 22) *Ibid.*, (邦訳, p.74).
- 23) *Ibid.*, (邦訳, p.74).
- 24) *Ibid.*, (邦訳, p.71).
- 25) *Ibid.*, (邦訳, p.71).
- 26) ・小池和男『日本の熟練』有斐閣, 1981, p.29.  
・車戸實編著『管理される管理者: 減量経営時代のミドル』日本経済新聞社, 1978, pp.213-222.
- 27) Deleuze, G. *op. cit.*, 1972 (邦訳, p.71).
- 28) Deleuze によれば、構造の要素間の関係は「微分的」なのだという。そして、この「微分的」とは、理念的で、潜在的だという。Sokal=Bricmontは、物理学者の立場から、Deleuze による微分も含めた数学的記述が、混乱し不適切であると痛烈に批判している。一方、小泉義之は、Deleuze の「微分」の意味について、つぎのように延べている。

座標平面上の線は、見えるものであり、現実的なものである。接線にしても、座標平面上に見えるものとして図示できるから、すなわち、座標平面上に顕在化可能なものであるから、現実化可能なものである。ところが、ベクトルを座標平面上に図示することはできないのである。ベクトルは、接点がどの方向に向かうかという動向を表現するから、座標平面上では見えないものである。矢印表示は、見えないものを見えさせるようにするための苦肉の策でしかない。したがって、ベクトルは、座標平面上の線として見えるものではないという意味で、現実的ではなく理念的である。また、座標平面上に顕在化可能なものではないという意味で、顕在的ではなく潜在的である。ベクトルは、理念的で潜在的なのである。そして微分とは、特定のベクトルとしてではなく、無数のベクトルとして定義されるものである。とすれば微分は、理念的で潜在的なベクトル場として定義されているということになる。かくて、微分的なものは、理念的で潜在的である(小泉義之, 2000, pp.37-38)。

詳細については以下の文献を参照。

- ・Sokal, A. and Bricmont, J. *Intellectual Impostures*, Profile Books, 1997, pp.145-158 (田崎晴明・大野克嗣・堀茂樹訳『「知」の欺瞞: ポストモダン思想における科学の濫用』岩波書店, 2000年, pp.205-225).
- ・小泉義之『ドゥルーズの哲学: 生命・自然・未来のために』講談社, 2000, pp.37-38.

- 29) Deleuze, G., *op. cit.*, 1972 (邦訳, p.76)
- 30) Whitehead, A.N., *op. cit.*, 1978, p.214 (邦訳, p.317).
- 31) Giddens, A., *New Rules of Sociological Method*, 2nd ed., Polity Press, 1993, p.128 (松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳『社会学の新しい方法規準：理解社会学の共感的批判』而立書房, 1992, p.173).
- 32) Giddens, A., *Central Problems in Social Theory: Action, Structure and Contradiction in Social Analysis*, TheMacmillan Press Ltd., 1979, p.66 (友枝敏雄・今田高俊・森重雄訳『社会理論の最前線』ハーベスト社, 1989, p.71).
- 33) Giddens, A., *op. cit.*, 1993, pp.128-129 (邦訳, p.174).
- 34) Giddens, A., *op. cit.*, 1979, p.69 (邦訳, p.75).
- 35) *Ibid.*, p.66 (邦訳, p.71).
- 36) *Ibid.*, p.70 (邦訳, p.75).
- 37) *Ibid.*, p.66 (邦訳, p.71).
- 38) Giddens, A., *Studies in Social and Political Theory*, Hutchinson & Co., 1977 (宮島喬他訳『社会理論の現代像』みすず書房, 1986, p.66).
- 39) *Ibid.*, (邦訳, p.66).
- 40) *Ibid.*, (邦訳, p.67).
- 41) Giddens, A., *op. cit.*, 1979, p.71 (邦訳, p.76).
- 42) 稲垣保弘『前掲書』2002, 第10章.
- 43) Dilthey, W., *Gesammelt Schriften*, 5. Band, 1924 (瀬島他訳『解釈学の根本問題』晃洋書房, 1977, p.106).
- 44) 稲垣保弘「組織の二面性」法政大学経営学会『経営志林』第47巻第2号, 2010年7月, pp.49-59.
- 45) Heidegger, M., *Sein und Zeit*, tübingen, 1927 (瀬島他訳『解釈学の根本問題』晃洋書房, 1977, p.127).